

乙女高原が好き！1204号

13年目の草刈りボランティア...今年も破られず 『乙女の草刈りに雨は降らない』ジंकス!!

草刈りの下見&準備会 (11月18日)

前日は冷たい雨,そして,今日は朝から北風。ロッジの庭の水たまりには氷,そして,大きな霜柱がありました。庭に点々とシカの足跡が付いていたのですが,足跡が固くなっていました。

町内の竹居商店で買ったペットボトルのお茶やジュースをロッジに運び入れていたら,雨宮さんと津野田さんが到着。さっそく,草原内を歩いて,看板や植物解説版をはずす作業をしていただきました。その間に,植原は物置の道具類をチェックしたり,整理したりしました。

三枝さんも到着。ロッジ内の掃除をお願いし,男3人でキッズの準備をするためにブナじいさんのもとへ向かいました。林道に積もった落ち葉をじいさんの根元まで運び入れるのがキッズボランティアです。林道はブナじいさんから斜面を下ったところにあるので,コンクリートの法面にははしごをかけ,斜面にはロープを張って,子どもたちが安全に昇り降りできるようにしました。ブナじいさんのまわりに柵を作り,その中に落ち葉が入れられるようにしました。ロッジでお茶を飲んだ後,古いトイレの掃除をし,草原の草刈り区画を割り振るためのテープを張り,今日の作業を終了しました。

毎年,こんな準備をして草刈りの日を迎えるのです。

毎年,進化を続ける草刈りボランティア (11月23日)

週間天気予報はずっと雨。しかも,日に日に降水確率がアップしています。今まで一度も雨に降られなかった活動ですが,ついに初めての雨天中止か...と,やきもきしていました。草刈りが終わった後の夜の天気予報でも「今日は全国的に雪や雨の荒れ模様の天気でした」と言っていました。ところがどっこい。乙女高原は時々日も差すくらいの絶好の草刈り日和。ポカポカ暖かいくらいの小春日和でした。参加した皆さんが口を揃えて(?)「オレ,晴れ男だから」「わたし,晴れ女だから」と言い合っているのが,なんか可愛かったです。これで13年連続,雨による中止はありません。

雨が予想される状況でしたが,今年も184人も乙女高原ファンが集まり,みんなで心地よい汗をかきました。参加者184人というのは多そうに聞こえるかもしれませんが,じつは過去最低です。特に子どもたちの参加はごく少なく,子どもに替わって大人



の皆さんにキッズボランティアに参加していただきました。また、機械刈りする方を制限したり、草運びに多くの人数を割いたりしたので、どの係も作業内容が多く、たいへんだったと思います。それでも皆さん、笑顔で作業してくださいました。軽微なものも含め、傷病者が一人もいませんでした。

毎年同じことの繰り返しのように見える草刈りですが、前年の反省をもとに少しずつ改善・進化させているんですよ。

第1に、刈り払い機を使っていただく方に制限をかけました。恩賜林組合など森林関係の方だけにしました。また、昨年まではいくつかの団体をまとめて班を作ったのですが、それをやめて、各組合をそのまま一つの班としました。これにより、指示系統が明確になり、また、各組合の分担箇所もはっきりさせることができました。これらが大きな事故防止策になりました。

第2に、路上駐車禁止の徹底です。昨年、(株)丸田丸さんのごみ収集車をお借りして刈り草を琴川ダム残土処分場まで運んだのですが、路上駐車のため、積み込み作業はやりにくいし、一般の車が来ると、いちいち作業を中断してごみ収集車を移動させなければならませんでした。

そこで、まずは駐車禁止を徹底させるためにコーンや駐車禁止の立て札を林道に立てました。さらに、駐車場係を多く配置し、ていねいに面倒を見たので、ロッジの庭にはなんと60台もの車を入れることができました。参加者数がいつもの年より少なかったことも幸いして、車を置ききることができました。今年も丸田丸さんのごみ収集車による草の運び出し・藁撒き作業を行いました。スムーズでした。東京農工大学・星野研究室による追跡調査が楽しみです。

第3に、草の運搬を作業を効率的に行うために、事前に一部草刈りをしておき、作業開始直後から草を運び出せるようにしました(草刈りは県の発注により、業者の方にしていただきました)。とはいえ、朝の雨で草はぐっしょりです。午前中ずっと草の運び出しばかりをしていた係の皆さんはたいへんだったと思います。

第4に、午前中の作業終了直後、昼食前に記念写真を撮ったことです。皆さんが作業に慣れてきたせいか、ここ数年ずっと、作業は午前中でほぼ終わってしまうくらいでした。となると、せっかく作業していただいたのに、お昼を食べないで、記念写真にも入らないで帰ってしまう方が多くなってきたのです。そこで、午前中の作業終了直後に記念写真を撮り、それからゆっくり昼食にし、閉会式を行うことにしました。これによって、作業が早く終わったグループにも少し待っていただくことができ、豚汁を配るタイミングも全員平等にすることができました。毎年、プロカメラマンの古屋さんに記念写真を撮っていただいています。

ファンクラブが下見と準備を行ったり、市で雨対策として急遽テントを用意してくれたり、竹居さんが今年も手前味噌や自家製の野菜をたくさん用意してくれたり、藤巻さんがそれに肉とゴボウを加えてくれたり……。たくさんの協力があって、この草刈りイベントが続けられています。

草刈り終了後、30人弱の方が残ってください、ファンクラブ恒例の茶話会をしました。おいしいお茶やおつまみをいただきながら、簡単な自己紹介・活動紹介のあと、草刈りの振り返りや情報交換をしました。みなさん、本当にありがとうございました。御苦労様でした。



高原の植物たちのオモシロ私生活

天気予報は雨。ところが、2月2日は朝から日差しがあり、暑いぐらいの陽気。草刈りに続いて、またも天気に恵まれました。ところが、体調不良等で参加できないスタッフ方が続出。おまけに、この日はイベントが目白押し。67人と予想より参加者が



「ようこそ乙女高原へ」展



乙女高原

少なく、せっかく興味深く楽しいお話が聞けたのに残念でした。

スタッフ集合は11時。全体ミーティングの後、係に分かれての準備が始まりました。机といすを並べたり、パソコンとプロジェクターのセッティングをしたり、湯茶の用意をしたり、受付の準備をしたり。交代でお弁当を食べながら、準備万端整えました。



高橋和弘さん



茶話会

午後1時、市観光課・飯島課長さんの司会で開会です。竹越市長のメッセージを代読していただいた後、プログラムに入りました。まずは『2012年度 乙女高原の活動報告』をファンクラブの三枝さんからいただきました。映像を交えながら、とてもいねいにお話いただきました。次に『12回のフォーラムの振り返り』。どんなゲストをお招きして、どんなプログラムで行ったかを植原から報告・紹介させていただきました。3番目に、麻布大学野生動物学研究室の学生・高橋さんから研究報告がありました。『乙女高原のシカは草原に影響を与えているのか！？』がテーマです。2年に渡って乙女高原で調査研究なされてきたまとめです。詳しい内容は次号で紹介します。ここではまとめだけ。乙女高原にシカが進入してきて数年程度と考えられるが、生息密度はすでに高い。シカは林をよく利用しているが、草原も利用している。

冬の間はササが重要なエサ。多くの大型草本はシカの影響を受けている。乙女高原の今後の保全にシカをどう位置づけるかは難しい問題。モニタリングが必要。

高橋さんから最後に感謝の言葉をいただき、思わずほろっときそうになりました。

そして、いよいよ今日のメインゲストである多田多恵子さんのお話。講師紹介は芳賀さんでした。講演終了後、質疑応答の時間を取り、飯島さんの司会で閉会行事を行いました。ファンクラブ代表世話人の宮原さんからお礼のあいさつがあり、内藤さんから諸連絡をしていただき、フォーラムを閉会しました。

その後、かたづけをし、恒例の茶話会。おいしい手作りの漬物等をつつきながら、短い時間ですが、講師を中心に楽しく情報交換をしました。とっても充実した半日でした。

多田さんのお話...ひとつひとつの植物に、ひとつひとつの物語がある

(多田さんのお話を聞いてまとめたのは植原です。文責は植原にあります)

(多田さんがまず取り出したのはケンボナシ。皆さんに回して、食べてもらいました)日本の木の実のヘンテコ・ナンバーワンだと思います。枝の先についている丸いのが実です。クニクニしているのは枝の部分なのですが、ここが食べられます。ちぎって食べるとおいしいんだ。英名はジャパニーズ・レーズン・ツリー。本当にレーズン(干しぶどう)の味です。外側にクニクニしているところがあり、内側に実が来ています。この形にも意味があるんですね。これらがそのままアングと食べられてしまうと、実も食べてもらえます。すると、ウンチの中にたねが出てくるのです。タヌキなんか食べています。冬の間、少しずつ木の上からポタポタ落ちてきて、少しずつ食べられます。

私たち一人ひとりに人生があり、物語があるのと同じように、植物にもひとつひとつに、ひとつひとつ物語があります。

それらの物語が関わり合っているからこそ、いろいろな花があったり、いろいろな動物が生きていけたりします。植物や動物の物語にはわからないことがいっぱいありますが、私たちが野外に出かけ、ある時は食べ、ある時は匂いをかぎ、ある時はひっくり返してみたりと、いろいろな関わり方をする、いろいろな物語がわかっていくかもしれません。

(葉の拡大写真を見せながら)のこぎりの葉が見えますね？ これ、ススキの葉っぱです。ススキを触ると、手がスパッと切れてしまうことがありますよね。ススキの葉の縁にはこんなに鋭いガラスの歯が付いているからなんです。ほんとうにガラスなんですよ。ススキって葉がピーンと立っていますよね。ピーンと立っているのは葉の縁だけでなく、維管束といって筋の部分にもガラスが含まれているからです。サメの歯のようにも見えますよね。このおかげで、動物から食われないで済むんです。ちなみに、これはガラスなので、燃やしても残ります。たとえば縄文時代の遺跡からススキやイネなどに含まれていたガラスが見つかり、イネを作っていたかどうかなどが分かることがあります。このように、植物が作ったガラスのことをプラント・オパールといいます。

山で草原になっているところは、ちゃんと理由があります。一つは、窪地になっているところです。窪地には夜の間に冷たい空気がたまりやすいので、木が入りにくく、湿原になりやすいです。もう一つは尾根や山頂です。こういう場所は風が強いので、木が育ちにくく、風衝草原という草原になりやすいです。これらは地形的な要因です。

もう一つ大きいのが人為的な要因です。日本では茅葺き屋根が多く建てられていたので、茅葺き用のススキを刈るための茅場がありました。また、里の土手や畦や茶畑は定期的に草が刈られ、里の野原になっていました。ツリガネニンジン山の花のように思われていますが、じつは里にもあった花です。ワレモコウやオミナエシ、リンドウもそうです。

人為的草原を継続させるには、刈ることが大事です。箱根の仙石原なんかはススキの草原として有名ですが、火入れをしています。火入れをすると、熱に弱い草は生えられなくなってしまうので、ススキなどごく限られた草原になってしまいます。また、草原の中に出てきた木を伐らないでいても、草が維持できなくなってしまう。もしも、人が手を入れなくなると、草原は林に変わっていきます。

乙女高原にも植物の移り変わりがあると聞きました。一つはシカの影響が大きいのですが、草原が安定してくると、姿を消してしまうような植物もあります。たとえばヤナギランという植物は英語でファイヤー・ウィードといいまして、火事跡植物です。火事が起きると、そこにさっと増えるけれども、ほかのいろいろな草が生えてくると、住みづらくなって姿を消してしまうんですが、その前にたくさんのたねを飛ばして、新しくできた空き地に移り住んでいきます。そんな植物なんです。

このように、植物の移り変わりには、植物が芽生えられる空き地があるかどうか、つまり『攪乱』(火事、崖崩れなど)があるかどうかという要因もあるのです。攪乱があるとヤナギランのような植物は真っ先に生えてきて、素早く成長し、花を咲かせます。でも、攪乱がしばらく起こらなくなると、もっと安定的に育つような植物がたくさん増えてきます。そして、ヤナギランは明け渡してしまいます。「草原を守っていると、減ってくる植物もある」ということです。

里で草原が維持されているところは今、茅葺き屋根の衰退とともにどんどん減少しています。乙女高原のような野原が守られているというのは、とても貴重なことです。大事にしていきましょう。

昔から、お花がたくさん咲く野原のことを『花野』と呼び、花野に咲く花を『野花』と言ってきました。京都の大原でお花を摘んで、京のまちで花を売る…そんな風習があった時代は、京都の郊外に花野が広がり、オミナエシやキキョウ、ワレモコウ、クガイソウ、キスゲの仲間など、草原を好む花がたくさんありました。そういう場所に人手が入らなくなり、荒れ放題になったり、花がきれいなために乱獲されてしまったということもあるし、こういうところに一回でもブルドーザーが入って掘り返されてしまうと、外来種が入り込んでしまうこともあります。セイタカアワダチソウやヒメジョオン、外来のイネ科の牧草や山だったらオオハングソウなどです。そういうものが入り込むと、在来種は芽生えのときに競争に負けてしまい、外来種に占領されてしまいます。そんないろいろな理由で、花野がほんとうに少なくなってしまいました。谷戸田でも、手が草刈りしているうちはいいのですが、大型の農業機械が入ったり、除草剤がまかれたりすると、土手や畦道の花野が簡単に失われてしまいます。

野花たちは一種のレストランであって、お客さんを招いています。衣装をまったり、香水をつけたりして。花を見ていると、しばしば虫がやってきます。わたしも皆さんと同じようにマルハナバチ大好きですが、マルハナバチってしばしばこんな格好をするんですね。下向きに咲いている花に頭を突っ込んで、まるで帽子をかぶっているみたい。ハンショウヅルもアキチョウジも。このような花たちはなんで下向きに咲くかという、ちゃんと理由があります。マルハナバチに来てもらいたいからです。こうやって花にぶら下がるには、アクロバチックな能力が必要で、かなりの腕力(八チだから脚力)がなければダメなんです。マルハナバチは力が強いので、ちゃんとぶらさがることができるんです。マルハナバチにしかできない芸当といっていいでしょう。逆に言えば、下向きに花を咲かせば、マルハナバチしか来れなくなるということです。

ツリフネソウの筒型の花はマルハナバチの行動と体格に合っています。このような花はマルハナバチの体格にぴったり合っているために、もぐり込んだら、後ずさりして出て来なければなりません。後ずさりをするというのは、簡単そうに見えて、簡単ではありません。マルハナバチはできますが、ハナアブと



多田多恵子さん



ツリフネソウにマルハナバチ

かはできません。アヤメもそうです。雌しべと花びらで筒を作っています。花びらのプラットホームに虫が着地し、黄色い筋を頼りに筒の中にもぐり込んで、後ずさりして出ていきます。

このような花はマルハナバチを呼んでいる花です。こういう花のもう一つの特徴は、蜜がどこにあるのか外から見てもわからないということです。これらの花はある程度の大きさがありますが、この大きさもマルハナバチに合わせた大きさになっています。花の中でも、外から見てお料理(蜜や花粉)が見えないのがあります。人間界も同じですが、だいたい高級なお店って路地裏にあって、知っている人にしか行き着けないようになっていいるじゃありませんか。花のレストランもそうで、複雑な形をしていたり、曲がりくねった奥のほうに蜜を隠していたりします。マルハナバチを呼んでいる花って、こんな高級フレンチみたいな店です。特別なお客さんだけ入れるようになっていいます。日本の美しい野花はマルハナバチによって支えられていると言っても過言ではないです。特に紫色の花が多いのも特徴です。

タケニグサも咲くと思いますが、ぜひ確かめてください。タケニグサの花は糸のような雄しべがたくさん出ているんですが、この雄しべを揺らすと花粉がたくさん落ちてきます。細長い糸みたいな雄しべは音叉の働きをします。固有振動数があり、ある特定の音が与えられると共振して、揺れが大きくなり、そのとき、たくさん花粉を落としてくれるようになります。タケニグサに来るマルハナバチを観察していると、来るまではブーンという羽音だったのに、タケニグサに来ると、違う音になります。しかも、その音がオオマルハナバチであっても、他の種類のマルハナバチであっても同じ音になります。そのときに落とされる花粉を体の毛で受け止めています。こういうのを英語でバズ・ポリネーションと呼んでいます。



タケニグサにオオマルハナバチ

トマトもそうです。雄しべの先端に小さな穴があって、そこから花粉がこぼれるんですが、単に振ったりしただけでは落ちてきません。でも、マルハナバチが特定の周波数で羽ばたくと、花粉が落ちてきます。温室トマトでは外来種であるセイヨウオオマルハナバチを受粉用に使っていますが、野に放つと問題なので、終われば焼却処分することになっています。ところが、北海道ではセイヨウオオマルハナバチが逃げ出して、繁殖しているのが見つかっています。

ハナアブがマルハナバチ媒花であるアヤメに来ているのを見ました。黄色い線が蜜に続いているのは理解しているようですが、うろろするばかりで、花に入れないで、あきらめて飛び去ってしまいました。つまり、この花はマルハナバチ以外の虫を排除していたわけです。

じゃあ、ハナアブはどうするのか？ 自然界にも、高級フレンチばかりでなく、ファミレスみたいな花もあるんですね。ナカマドの花に来ていました。小さな花がたくさん咲いていて、上向きに咲いています。どこに止まっても大丈夫だし、上から雄しべも雌しべも蜜のありかもよく見えています。後ずさりをする必要もないし、ぶら下がる必要もない。

このように自然界にはハナアブ用の花もちゃんと用意されています。オトギリソウやフクジュソウ、キクの仲間もそうです。上向きで、開けっぴろげで、上から見て雄しべや雌しべ、蜜のありがたみがよく分かるような花です。料理の中身がよく見えて、止まりやすく、入りやすい、それから、なぜか、人間界のファミレスも黄色い外装のものが多くありますが、自然界でも白とか黄色とか明るい色をしていて目立つのはハエやアブを呼んでいる花です。

ハエやアブはマルハナバチに比べ、同じ種類の花から花へ運ぶ花粉の効率はよくないけれど、個体数が多いので、そこそこ花粉を運んでくれます。マルハナバチは個体数が少ないけれど、忠実に同じ花を訪れ、花粉を運んでくれます。リピーターのお客さんになってくれるということです。ある花はマルハナバチ専門になるし、ある花はいろいろな虫が気軽に訪れるファミレスみたいになり、花は多様になっていきます。

じつは、マルハナバチ用の花とアブ用の花では咲き方も違ってきます。マルハナバチ用の花は一面に群れ咲くことにはしないで、点在しています。マルハナバチはリピーターなので、点在しても同じ種類の花に行ってくれるからです。アブ用の花では一面に群れ咲きます。アブはとりあえず身近な花に行ってしまうから、隣にも同じ種類の花が咲いていたほうがいいのです。にぎやかな商店街は、通りすがりのアブ狙いということでしょうか。

では、スマレにはどんなお客さんが来るのか？ スマレは虫の訪れが少ない花です。春先の花は結実率が1/3くらいです。それでも、待っていると、飛んできます。ピロードツリアブです。胴体と同じくらいの長さのストロー状の口を持っています。スマレは花の後ろに細長い筒がありますが、ちょうどそれと同じ長さです。キランソウもそうです。ジロボウエンゴサクも長い筒を持っています。スマレのことは昔から太郎坊と呼んでいました。こちら(ジロボウエンゴサク)は次郎坊です。花同士、細長い筒をひっかけあって、花相撲をするので太郎坊・二郎坊です。スマレはスマレ科、ジロボウ...はケンシ科で全然違う分類群ですが、同じような花の形をしている、その理由は、同じ虫に花粉を運んでもらっているからなのです。このように、春先に咲く、薄紫の細長い筒を持った花のお客さんはピロードツリアブです。



ミヤマスマレにピロードツリアブ

野花にはいろいろな形があって、いろいろな色があるのは、いろいろなお客さんに店を開いているからだということがわかります。いったい誰のレストランなんだろう？...わかってない花もたくさんあります。でも、とにかく、たくさん花が咲いているということは、たくさんのお客さんもいるということなのです。私たちが観察している自然はほんの一瞬だし、ほんの一部なので、なかなか全体像を理解することはできませんが、私たちの知らないところで、花とそれを訪れるお客さ

んとの関係がたくさん結ばれていて、それが何十何百万年も続いてきた結果を、今、私たちが見ているのです。

私たち人間の色の見え方に比べ、ミツバチは紫外線もよく見えています。反面、赤い色は見えていません。となると、コオニユリやレンゲツツジ、フシグロセンノウといった朱赤の花には何が来ているのか？ ここにはアゲハの仲間が来ています。虫の多くは朱赤が見えていないのですが、アゲハの仲間には例外的に見えています。朱赤の花はアゲハチョウ媒花です。アゲハがコオニユリに止まると、花粉がべったり付きます。アゲハの羽根がバタバタしても簡単に取れないように花粉がべとべとしています。しかも、花粉の色は赤です。他の虫には見えていません。

甲虫はとても不器用なので、平べったくて、どこに降りてきても大丈夫で、バタバタと花の上を歩くうちに花粉が運ばれて・・・というタイプの花のお客さんです。タマアジサイなどです。

花の中にはより多くの種類のお客さんに来てもらっている花もあります。誰もが立ち寄りやすい花です。クガイソウです。筒型ですが、そんなに深くなく、雄しべや雌しべが見えています。チョウもアブもマルハナバチも来ます。でも、観察していると、チョウやアブはぼっと来て、ぼっと飛び去ってしまいますが、マルハナバチは一番下の雌しべが突き出している花に止まり、らせん状にグルグル回りながら蜜を集め、上の方の雄しべが突き出している花まで行って、飛んでいきます。この行動は別の花の花粉をその花の雌しべに付け、その花の花粉を次の花の雌しべに運ぶこととなります。やっぱりマルハナバチが一番効率よく花粉を運んでくれる上得意さんです。

花街の裏通りには、マムシグサのような暴力バーもあります。妖しい色と姿と匂いがするのは、必ず裏があります。花の真ん中のこん棒状のものからはキノコの匂いが出ます。これに誘われてキノコバエがやってきます。中に入ると、花の内面がツルツルしていて、出られなくなります。でも、雄花の下にはちゃんと脱出用の穴が用意されていて、ここから出て行けます。でも、雌花には出口がないので、閉じ込められてしまいます。切り開いてみると、犠牲者のハエの死体が出てきます。こん棒状のものの上にはネズミ返しならぬ「キノコバエ返し」があり、上に行けなくなっています。閉じ込められながら、雌しべに花粉を運びます。

乙女高原にはギンリョウソウがたくさんあると思いますが、ギンリョウソウは腐生植物といって、栄養をキノコからもらっています。真っ白で光合成をしていません。根は電線のコードのようになっていて、外側のピニールの部分がギンリョウソウ、内側の銅線の部分がキノコの菌糸とギンリョウソウです。根の塊を全体的にみると、まわりの木の根ともつながっています。ギンリョウソウはキノコに養われているのですが、キノコはまわりの木とも共生関係を結んでいるのです。ギンリョウソウは透明感のある白で、白いドレスをまとった妖精のようにも見えますが、じつは、本当に森の妖精なんです。自分では光合成をせず、稼いでいませんが、森の木全体に養われている植物なんです。マルハナバチがやってきて、蜜を吸っていくなされていいます。実が可愛くて、ゲゲゲの鬼太郎の目玉オヤジみたいです。実はジューシーです。誰がたねを運ぶのかわかっていません。今のところ、モリチャバナゴキブリが齧っていたという目撃例があるだけです。

ギンリョウソウと同じ仲間、シャクジョウソウは風にたねを飛ばします。ウメガサソウもこの仲間、緑の葉をつけますが、キノコに養ってもらっています。こういう植物は、生まれてすぐにキノコに養ってもらうので、たねを大きくする必要はなく、小さいたねをたくさん付けます。植物の中でもランと並んで、一番小さなたねを作る仲間です。イチヤクソウのたねもすごく小さくて、風に飛ばされるたねです。森の中でたくさん見つかりますが、取ってきて育てようと思っても育ちません。菌類から離されると、生きていけないのです。

わたしは虫も好きです。虫やカエルや小動物のことも嫌わないでね。鳥の糞そっくりのイモムシも楽しいし、幼虫を直接出産するアブラムシもすごいです。

私たちは自然のほんの一瞬しか見えていないし、知らないけれど、想像力を働かせたり、足しげく通ったり、私たちの方からアプローチすることで、一瞬しか見えていない自然も見えてくることがあります。一つのフィールドに足しげく通うことはとても大切で、継続的に見ることによって、一つの植物の成長や移り変わりや、たまたまの出会いがあるかもしれないし、いろんなものの変わりながら生きている姿も見えてきます。そういうことを継続することで、見えている自然も、見えていない自然もすこずつ理解でき、いろいろつながりも見えてくるようになっていくと思います。(おわり)



コオニユリにキアゲハ



クガイソウにミヤママルハナバチ



マムシグサ



ギンリョウソウ

第9回全国草原サミット・シンポジウムinみなかみ

昨年(2012年)の10月27日(土)～29日(月)にかけて群馬県みなかみ町で行われた「第9回全国草原サミット・シンポジウム」に参加してきました。地元役場職員を中心としたスタッフの皆さんの「おもてなしの心」を絶えず感じながら、有意義な時間を過ごすことができました。(植原・記)

1日目 現地見学会

集合場所はスキー場の駐車場。さすがは谷川岳を越えるとすぐに越後の豪雪地帯となる『関東の北の果て』です。そこからさらに少しだけ車で送り迎えをしていただき、現地に向かいました。そこは乙女高原の草原と同じくらいの広さの草原『上の原』です。ここはもともと広大な地元の入会地でしたが、ご多分に洩れず、そのほとんどがゴルフ場になってしまったそうです。かろうじて残った草原を『森林塾・青水』という団体が借り受け、地元の人々といっしょに生きもの調査をしたり、野焼きや茅刈りを復活させたりしています。そんな活動が背景としてあり、今回の草原シンポジウム・サミットの開催となったわけです。

1日目のプログラムは茅刈り体験と見学会の2コースに別れて行われました。ぼくは見学会のほうに参加しました。

まずは青水の増井さんと地元の林さんの案内で草原を歩きました。清水によって草原管理が復活される前は、13年前の乙女高原と同じように、草原の中にシラカバがかなり侵入していたそうです。「そのときのシラカバを全部伐らないで、何本か残しました」とのこと。乙女高原と同じだと思いました。林さんからは、「昔の草原とのつきあい」に関するおもしろい話がたくさん聞けました。

その後、マイクロバスで移動し、首都圏の水がめの一つ藤原ダムや諏訪神社の舞殿と雲越家住宅を見学しました。これらの家屋の茅葺きに使われている茅は上の原で刈られたものだそうです。3年前に訪れたときには、諏訪神社の舞殿の屋根は相当年季の入ったもので、たくさんの若木まで生えていました。それが、今回、屋根の半分が葺き替えられ、新品になっていました。草原管理を目的とした草原管理ではなく、なんとか地域や地域経済に貢献するような草原管理を目指しているんだなあと思いました。



草刈り体験グループが作った茅のポッチ

2日目 草原シンポジウム

午前中は養父・和歌山大学教授による基調講演と各地からの実践報告(ここで乙女の報告も!), 午後は4つのテーマに分かれての分科会, そして、夜は懇親会が行われました。

基調講演は和歌山大学教授の養父志乃夫(やぶしのぶ)さん。著書として、たとえば『里地里山文化論』(上下)農文協があります。里山を上手に利用してきた里山文化こそ、今後、私たちが持続的に暮らしていくためのキーワードであるというテーマのお話でした。里山でのさまざまな動植物の利用法や田畑の作り方、暮らし方が、どれくらい生態学的に理に適ったものなのか、例を挙げてお話くださいました。また、東南アジアの「稲作文化圏」では、日本の里山と同じような生活の知恵や生活様式がみられるという興味深い話もありました。

個人的におもしろかったのは、島根県隠岐の「牧畑(まきはた)」です。焼畑はもちろん聞いたことがありましたが、牧畑というのは初めて聞きました。牧は個人所有地ですが、牛や馬を放牧するときには共有地として扱われ、牛や馬を放牧する



養父さんの基調講演

ことでその糞により土地の生産性を高め、そこで麦、芋、豆、粟・稗を作り、生産性の落ちたところで、また放牧地として活用していくサイクルなんだそうです。そんな牧が何箇所もあり、それらが順番に活用されていくところは、まさに焼畑や雑木林と同じような持続可能・循環型、そして、生物多様性を高める効果のある土地利用です。

話がとても興味深かったし、宿が同じだったので、毎晩、いろいろなお話を伺い、これもとてもおもしろかったので、ご著書を購入させていただきました(高額でしたが……)。

実践報告は3箇所から。一つ目は乙女高原での活動を植原が、二つ目は阿蘇での活動を阿蘇グリーンストックの山内さんが、最後は昨日の見学会でも訪れたみなかみ町藤原地区上の原での活動を海老沢さんから。それぞれ特徴があっっておもしろかったです。乙女の活動は、小さな草原でも地元の人たちに愛され、行政と一体となって活動しています。阿蘇の草原は雄大で、報告された山内さんは「阿蘇グリーンストック」という公益財団法人の専務理事です。草原も雄大なら、活動規模も大きいです。高齢化によって野焼きの存続が危ぶまれ、野焼きボランティアによる応援態勢を整えるまでの苦労話を聞くことができました。上の原での活動は「流域 commons」というコンセプトのもと、川の上流の自然を下流に住む都市住民が協力しながら保全していこうという活動です。アクションをしにかけているのが森林塾青水という都市住民であるところが特徴だと思いました。野焼きや茅刈りを復元するのですが、現代的な視点や遊び心・オチャメな要素を取り入れているところがいいです(茅刈りのコンテストや昔の道をフットパスというんだかハイカラな言葉で再発見・再利用しているところなど)。



午後の分科会は4つのテーマに分かれ、それぞれ民宿を会場に行われました。一つ目は、地域のいろいろな資源を地図にしていって通して、地域資源を確認したり、外に発信していく活動。二つ目は、草資源をどのように多面的に活用していくかという話。もちろん、その中には茅葺き屋根も含まれます。3つめは、草原の価値を表現するのに、万人にわかりやすいように、お金に換算できないかという話。そして、4つめが草原の活用の一つとしてのエコ・ツーリズム。自然に親しみ、自然を知り、自然を守る旅行形態についてです。

ぼくはこの第4分科会に参加しましたが、印象に残ったのが、地元温泉旅館の社長さんのお話でした。「温泉泊覧会」というイベントをしかけ、観光客の皆さんにプログラムを提供するのですが、そのプログラム一つ一つは、決して大きなものではないのですが、地元の方が提供しているもので、コンセプトは「地元の宝物、再発見」というものでした。観光客の皆さんは他の地域にはない「オンリーワン」の体験ができ、地元の皆さんは地域資源が地域の財産であることを(観光客を通して)再確認できる、すばらしい場を提供しているなと思いました。



夜の懇親会は、スキー場のレストハウスに会場を移しての実施。豪華なバイキングでした。「ここで(山の中だというのに)トロの刺身でも出てきたら、幻滅だなあ」と密かに不安だったのですが、それはまったくの杞憂でした。出された料理は、ごみのおひたしや鯉こくなど、地元産のものばかり。どれもとってもおいしかったです。

三日目 草原サミット

いよいよ最終日。草原を抱える9人の市町村長さんたちが登壇し、それぞれ話をしていただくという草原サミットです。まず、昨日の草原シンポジウムの報告を、全国草原再生ネットワークの高橋さんがしました。「シンポジウムの報告」といいながら、私たち民間レベルで考えている草原を維持していく上での課題を、市町村長さんたちに伝えていく場になっていました。次は市町村長さんたちの話を次々に聞くだけです。つまらないかなーと思っていましたが、それぞれの市町村長さんのお話は、それぞれ特徴があり、おらが町の自慢話が入っていたり、いろいろな取り組みがあったりと、とてもおもしろかったです。山梨市長さんがこの場にいてくださったらなあ……と思いました。



2012年度 定期総会 と 座談会

今年も定期総会の時期になりました。「乙女高原の自然を次の世代に」を合言葉に活動してきた乙女高原ファンクラブもいよいよ12年目に突入です。

総会では今年度1年間を映像で振り返り、来年度の活動計画を話し合います。「先進地に行き、活動の様子を見てきたい」「子どもたちとキャンプをしたい」「フォーラムに さんを呼びたい」など、アイデアを出し合ひましょう。

また、今回は世話人の改選があります。「乙女高原の自然を次の世代に」確実に譲り渡すために骨を折っていただけるとい方は、ぜひ立候補をお願いします。できるだけたくさんの方で支える乙女高原ファンクラブにしていきたいと思います。

普通会員の方の封筒には出欠ハガキが同封されています。必要事項をご記入の上、早めに投函してください。総会は普通会員の過半数の出席（委任状も含む）が必要です。流会にならないようご協力をよろしくお願いします。

座 談 会

例年、どなたかに話題提供をお願いしてきましたが、今回は、参加者全員で意見を出し合う時間を確保しようということで、特に話題提供者を決めないことにしました。集まった皆さんで、特にテーマも決めず、自由に意見を出し合ひましょう。皆さんのご参加を心からお待ちしています。

里山の全国的なモニタリング調査に参加します

環境省では、日本全国1000箇所の自然の100年間の変化を継続調査していこうというプロジェクトに取り組んでいます。『モニタリングサイト1000』といいます。このうち、里山の自然については(公益財団法人)日本自然保護協会が事務局を担当し、全国の団体とともに調査を進めているそうです。このたび、2013年度から5年間調査を行うサイトの公募がありましたので、乙女高原ファンクラブとして応募し、『モニタリングサイト1000里地調査サイト』として登録されることになりました。

サイトに登録されると、9つの調査項目の中からいくつか選んで5年間、継続調査をしていきます。乙女高原で選んだ項目は『アカガエル類(の産卵)』です。どなたか一緒に調査してみませんか？

調査マニュアルをいただきましたし、調査のための研修会も開催されるそうです。乙女高原でのヤマアカガエルの産卵についてはここ数年間のデータもあります。特別な知識や技術は必要ありません。この調査に興味のある方は、お気軽に事務局までご連絡ください。



あいおいニッセイ同和損保さんより寄付金をいただきました

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社よりweb約款契約者数に応じた寄付金として64,686円いただきました。乙女高原の自然を守るために大切にに使わせていただきます。ありがとうございました。

山梨技建さんよりヘルメットをいただきました

山梨技建さんより、草刈り等の作業時に活用できるよう、新品のヘルメット20個を寄付していただきました。大切にに使わせていただきます。

乙女高原ファンクラブの事務局だよ

乙女高原フィールドガイド『乙女高原のお花たち』と『マルハナバチ・ウォッチング』が増刷の時期を迎えます。この機会に直したほうがいい点がありましたら、教えてください。10周年を期にメールマガジンを編集して出版する予定だった本。来年度やっと出せそうです。A4判600ページの大作です。ご期待ください。

乙女高原ファンクラブの刊行物

乙女高原インタープリテーションのテキスト『乙女高原案内人 誕生と成長の記録』

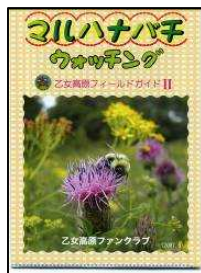
(A4判186ページ)乙女高原案内人養成講座の中身と、その後の案内人の活動の様子を一冊の本にしました。希望者には実費でお分けします。1冊1,000円、送料は一冊につき80円。欲しい方は郵便振込で1冊につき1,080円を送金してください。



乙女高原ファンクラブ

乙女高原フィールドガイド シリーズ

欲しい方は事務局までご連絡ください



フィールドガイド 『乙女高原のスマレウォッチング』

(A3判両面カラー)乙女高原では、なんと18種類ものスマレを観察できます。このフィールドガイドでは乙女で見られるスマレたちのプロフィールを紹介するとともに、スマレ観察のポイントをていねいに解説しました。

フィールドガイド 『マルハナバチの観察と調査のおともに』

(A3判両面カラー)マルハナバチの生態、ファンクラブで行っている調査、乙女高原で見られる6種(+2種)のマルハナバチの見分け方をコンパクトにまとめました。

フィールドガイド 『乙女高原のお花たち』

(A3判両面カラー)乙女高原フィールドガイドの第1号。春から秋にかけて咲く47種類の草花を写真つきでコンパクトに紹介。草丈の表示や草花を一言で表したコメントが「分かりやすい」と評判です。

乙女高原ファンクラブの普通会员になりませんか？

乙女高原ファンクラブの会員には普通会员とサポーター会員の2種類があります。会報(ニュースレター)は年4回発行予定です。年に1度は全会員に送っていますが、この号も含めてあとの3号はサポーター会員には送っていません。

乙女高原ファンクラブに入会するには・・・

- ・「入会します 氏名・郵便番号・住所・電話番号」という内容のファックス、メール、手紙等を事務局までお届けいただければ、いつでも、だれでも会員になれます。
- ・入会金も年会費もありません。乙女高原を守る力が1人分、大きくなります。
- ・普通会员には年4回、サポーター会員には年1回、ニュースレターが届きます。
- ・普通会员には総会出席の義務がありますが(委任状可)、サポーター会員にはありません。

乙女高原ファンクラブへの連絡先

【事務局】植原 彰(方) 〒404-0013 山梨県山梨市牧丘町窪平 1110-3
TEL/FAX 0553-35-3682 電子メール otomefc@fruits.jp
会報への原稿や写真等の投稿もこちらにお送りください。
WEB <http://fruits.jp/~otomefc/>

郵便振込 (番号)00220-8-71093 (加入者名)乙女高原ファンクラブ